譚嗣同の仁學に就て（二）

福島俊翁

私は本誌第四十一號に於て清末の志士譚嗣同の遺著「仁學」に論述された主張の一端を紹介しておいたつもりであるが、今またこゝにその思想の樞軸とも觀らるる諸點に就て要記したいと思ふ。

前稿にも一寸述べた樣に譚嗣同は「仁」の原理としては通ずるといふことが第一義として取り擧げらるることを言つてゐる。而してこの通ずるといふことには四つの義があつて、㈠人我通、㈡男女內外通、㈢上下通、㈣中外通といふのがそれであるとしてゐる。

㈠ 人我通といふのはこの四通の總義であつて人と我との差別を去つて全世界を一體として見ることである。譚嗣同の言ふ所では、凡そ親疏といふ如きことは單に肉體的の關係である。天地萬物人我を通じて一身と爲すものには何等親疏の別がある理はない。仁といふことは必ずしも人を愛するといふことではない。愛するといふことが已に壅塞の大なるものである。凡そ愛する所があれば必ず愛せざる所がある。愛の及ばざる所は卽ち不愛の及ばざる所である。この愛と不愛との關係は一方に愛する者があれば他方に愛せざるものを生ずるといふだけに止まらない。其の愛する所が卽ち愛せざる所である。愚夫愚婦は其の最も愛する所に於て咆哮の威を肆にし（大聲でドナリ散らす）いよいよ愛すれば愛する程それが甚しいのである。卽ち愛の根本と不愛の根本とは畢竟同一物であるから不愛を斷ずる爲には先づ愛を斷たねばならぬ。愛と不愛とは妄りに分別を生ずる結果であつて人我を通ぜざらしめる原因である。之はその根本に遡つて觀ると人々の意識の作用に歸する。故に人我通じて一となることを求めるには人々の意識を斷じ

て無我とならねばならぬ。無我であるならば差別が無く、差別が無ければ平等となる。平等に至つて始めて彼此洞徹一塵を隔てず過去現在未來に亘つて人我相通ずる極致に達するので、之を接近せしめねばならぬといふのである。元來男女は同じく天地の菁英であり、無量の盛德大業を有し、同等均平であるべきである。佛書には女子が男身に轉じて成佛する說もあるが、それは小乘敎の說で華嚴經や維摩經の如きものには女子は自ら女身で轉身の說は無く、從つて男を重んじて女子を輕んずるといふことは無い、易經にも陽が陰に下り、男が女に下れば吉である。之に反すれば凶或は吝であると說き男女の平等を認めてゐる。男を重んじ女を輕んずるのは實に暴亂無法の極であると言ふのである。之は現代のように男女同權の法が一般社會に認められてゐる場合には特說する要はないかも知れないが、當時の中國の家族制度に向つては或は靑天の霹靂であつたであらう。

(三)　上下通。之は君臣父子夫婦の間の服從關係を廢して平等の關係におくべきを言ふのである。卽ち彼はこゝに人倫の大本として敎へられてゐる三綱を否定する所に仁が見はれるとするのである。所謂三綱とは君は臣の綱、父は子の綱、夫は婦の綱といふことであるが、之は凡て上下不平等の關係であるが世人は之を當然の事として認めて何等疑ふ所がない。特に君臣の關係は從來の如き觀念を以てすれば、不平等の最も甚しいものである。元來生民の初には君臣といふ者は無く、皆均しく民であつた。民と民とは互に相治めることが出來ぬし、亦相治める暇がない。こゝに於て一民を擧げて君とした。卽ち民が君を擇んだのである。民があつて後に君が出來たのであるから君は末で民は本である。君は民の爲に事を辨ずるものであり、臣は君を助けて民事を辨ずるものである。賦稅を民から取るのは民事を辨ずる爲の資財である。かくして事が辨じられなければ其の人を易へることは天下の通義である。彼の鄕社賽會でも必ず一長を擇擧して會の事を治めさすが長たるに足らなければ之を易へる事は愚夫愿農でも知つてゐる。何ぞ獨り君に於て然らざる理があらう。かつ又之を擧げ之を戴き乃ち天下の身命膏血を竭して其の享樂怠傲に供し驕奢にして淫殺することを許し得られよう。一身を供して足らず又百官を濫りに縱にし、又之を世々萬代の子孫に傳へようとす

る。一切の酷毒不可思議の法が此より繁興するのであるが民は首を俯して恬然として其の鼎鑊刀鋸をうけて怪しまないことは實に怪しむ可きことである。然るに君が亡びんとする場合は其の臣が節に死することを要求する。然し君も亦一人の民である。更に之を尋常の民に較べても寧ろ末である。民と民との關係に於て相爲に死するの理はない、本たる民が末たる君の爲に死するといふ理は更に無い。唯、事の爲に死する道理は成り立つかも知れないが、決して君の爲に死する底の道理はない。君の爲に死ぬるのは宦官宮妾の愛であり匹夫匹婦の諒(まこと)でしかない。人が甘んじて宦官や宮妾となり、匹夫匹婦たるを免れないならば又何をか誅めんやである。天下の民を奴隷の如く使役する者は民が節に死することを甚だ樂しむものである。然し一姓の興亡は渺々乎として小なるものである。民の興る所ではない。然るに節に死する者は或は數萬にして止まらぬ。本末を倒置してゐるといはねばならぬ。伯夷叔齊の死は暴君紂王の爲ではなかつた。固より自ら暴を以て暴に易へると言つてゐる。則ち君主の暴を見るに忍びずして遂に一瞑して萬世視ずといふことである。

尤もまた假に民が互に擇んだ君の爲に命を捧げることは有り得るとしても、後世の君主の如く兵馬の力で天下を奪つた者に向つて此の道は當嵌らない。況んや滿漢種族の見を持して天下を奴役する者に於ておやである。凡て天下の民を奴役する者は、人がその爲に死ぬるのを後主として深く惡むものである。而して事變が甫めて定り、己の天下になれば之を祠り之に祈るといふ態度に出る。それは後の人が己の爲に節を守り死することを欲するからである。かうした場合、山林幽貞の士は在室の處女の如きものであるが、之を脅かして出仕を迫り、出仕せなければ誅戮を加へる。恰も兵刃を挾んで處女を摟し亂すが如くである。而して其の出でて仕へるや、不貞を詬り、其の失節を暴として貳臣傳を作つて之を辱める。之は啻に其の人を辱かしめるばかりでなく、實は陰に天下後世の者を嚇して敢て己に背き去らしめない手段である。忠不忠を論ずる譯ではないのである。凡そ古の忠といふ意味は眞實を盡すことである。下のものが上に事へるに實を以てし、上の下を待つに實を以てするのが忠である。忠は上下を通じて互に眞實を盡し

合ふことである。獨り臣下にのみ責むる道であつてはならない。要するに君臣の關係は其の根本義に於て上下通ずることでなくてはならぬ。こゝに平等の理があり、こゝに仁が在るのである。故に孔子も君統を廢して民主を立てんとし、「易」、「春秋」の中に不平等を革めて平等に歸せしめる微言大義を示してゐるのである。この孔子の思想は一方曾子子思を經て孟子に傳はり、孟子は孔子の志を宣べて民主主義を唱へ、他方は孔門の子夏から田子方を經て莊子に至り、莊子亦君主制を痛詆してゐるのである。然るにこの二派の學は後に絶えて傳らない間に荀子が出て孔子の名を冒して、君權尊重を强調した。この荀子の學が二千餘年所謂孔子教の名に於て天下を制することとなつた。君主に無限の權を與へんとした荀子學徒は、今日萬戮せらるると雖も、其の孔子を賣つた罪を贖ふことは出來ないのである。と以上の如く譚嗣同は中國の政體に論及して上下通の必然を叫び、單に中國の一境を救ふのみで無く、全地球の一切人類を救はねばならぬとし、後記の如き中外通の說を擧げてゐる。

上述の君臣平等といふことは上下通の一面であるが父子の平等といふことも上下通の內容を爲すのである。卽ち從來父子の關係は天の命ずる所で之を如何ともす可らざるものの如くに考へられてゐるのであるが、この考は體魄（肉體、物質）に執はれて靈魂を見ない誤で、天命を知らぬこと之より甚だしいものは無い。元來人は天の子である。父も天の子であり、子も亦天の子であつて、父子は已に平等であるから、父が子を壓服する道理は毛頭ないのである。天と人も元來平等なので天と雖も人を凌壓する事は出來ない。莊子は「相忘爲上。孝爲次焉」と言つてゐる。こゝの相忘れるといふことは平等といふ意である。然しこゝに相忘れると言つても孝がないと謂ふ譯ではない。「法すら尙ほ舍つべし。何ぞ況んや非法をや、孝且つ不可なり、何ぞ況んや不孝をや」と言ふことが出來よう。父子關係は天合であるといふ。父母と子とは肉體的のつながりはある。然し姑と嫁、後母と前子、庶妾と嫡子との關係に於ては明かに肉體的關係の認む可きものはない。然るに三綱といふ義で人を懾れしめて其の膽を破り、其の魂を殺すに至ること實父母以上のものがある。更に夫婦の間に於ても夫は妻の綱たることを自命して、其の婦を遇する所以は殆んど人

間を以て齒せない。古は堂から下つて求め去る者があつても尙ほ自主權を失はなかつたが、秦の暴法以來宋儒の如きが煽り立てて「餓死事小、失節事大」といふ樣な瞽說を爲すに至り家庭は一牢獄といふ感を持たすといふ不幸を婦人に與へてゐる。之も常人は或は忌む所があつて夫權を肆にせない場合もあるが、彼の君主は獨り三綱を兼ねて其の上に據り、父子夫婦の間が雖双の地と視られてゐることは靑史の記する所によつて明かである。今日の制度では君主の伯叔父や從祖祖父ですら朝夕燕見には君主に對して拜跪の禮を執らねばならぬ。甚しきに至つては生みの父母にさへ之を臣とし之を妾として答禮をしないことがある。中國は動もすれば人倫道德を以て自ら異を矜り、外人を疾視する風がある。然るに君たるものに反つて眞の倫常がないのに氣附かず相習つて怪しむことを知らないのである。

其の尤も憤る可きは、己は夫婦の倫を瀆亂し多くの婦人を宮中に蓄へて居り乍ら、臣下には夫婦關係を絕たす樣な宮刑を行つたり、又宮人を幽閉して喜んでゐる。其の殘暴は禽獸でも及ばぬ程である。然るに臣は媚を獻ずることを工みにし、其の惡を飾つて其の位の嗣續を說くのである。天下は民衆の天下でなくてはならぬ。獨夫民賊の天下であつてはならぬ。獨夫民賊の嗣續のものであつてもならぬ。獨夫民賊は三綱の名を甚だ樂しみ、一切の刑律制度は皆此を準據としてゐる。それは自己に便にする理由から來てゐるのである。

(四) 中外通。前にも述べた樣に譚嗣同は自國民を救ふに止まらず全人類が救はれねばならぬことを理想とし、世界を一とする意味で中外通といふことを說くのである。この中外通ずといふのは先づ國境を撤廢することである。元來世界の各國が互に國を建てて高く障壁を設け、或は互に猜忌したり、欺謾したり、爭奪を事とするのは大いに謬つてゐるので、同じ地球上に生活する人類に、國といふ樣な區劃が造られる筈は無い。莊子は、

聞レ在二宥天下一。不レ聞治二天下一。

と言つてゐる。一體治めるといふことは國を有することを意味するが、こゝに言ふ在宥といふのは自由といふ語の轉音であつて、無國の義である。人類は自由で無くてはならぬし、無國の民でなくてはならぬ。國が無いのは所謂國境

が無く、中外が通ずることである。かくて戰爭が止み、猜忌が絶え權謀を棄て彼我が亡び平等になる。天下が有つても天下の無いと同じく君臣が廢せられ、貴賤の別が無く、公理が明かになつて貧富が均しく千里萬里一家の如く一人の如く、其の家を視ること逆旅の如く、其の人を視ること同胞と同じであつて、父として其の慈を用ふることなく、子として其の孝を用ふる所なく、兄弟として其の友恭を忘れ去り、夫婦として其の倡隨を忘れるに至る。これが卽ち大同の象である。又經濟的の方面に於ても中外通じて財の平均を得なければならない。

國と國との間に財を通じ富の平均を計るには國際間の通商に俟つ可きで所謂自由貿易が必要である。現在列國が保護關稅を設けて外貨の輸入を防がうとしてゐるのは徒に爭亂の基をつくるに過ぎない。曾て孟子は一治一亂といふことを言つたが、この一治一亂する主たる原因は人口と生活物資との關係にあるので治世が續いて人類が繁殖し、生活物資が不足する狀態になると世が亂れる。若し自由貿易によつて中外の財が互に流通平均するならば自他共に亂に苦しむに至らないであらう。この通商は兩利の道であり兩仁の道であると言つてゐる。さらに譚嗣同には頗る特色のある經濟思想がある。それは奢侈をすゝめ儉約を斥けることが貧富の不平等を解く所以であると見る說である。卽ち儉約は財を壅塞するので、人の欲望が橫流し、掠奪、篡弑といつた樣な禍を釀すことになる。天下の者が誰でも奢侈が出來る樣になれば人の性がこゝに盡され、儉にも奢にもこだわらずして等しく淡泊になる、こゝに始めて天下が太平に歸するといふのである。

彼はいふ、天下を私する者は儉を尙ぶ。その財は偏して塞がる。塞がるが故に亂れる。天下を公にする者は奢を尙ぶ。その財が均しくして財を有り餘る程に生產し、人人に十分欲望を滿足せしむ可きであるといふに在るので、昔の墨子などの經濟觀とは全然立場を異にしてゐるとは言へ、富の平均を求める精神丈は少しも變らない樣である。

以上の如く四通を以て仁の原理とし、「仁は天地萬物を以て一體と爲す」といひ、平等といふことを其の象としてゐるのである。彼は通ずれば必ず靈魂を尊ぶ。平等なれば體魄は靈魂となる。靈魂は智慧の屬、體魄は業識に屬す。

智慧は仁より生じ、仁は天地萬物の源、故に唯心唯識であると言ふのである。

要するに譚嗣同は中國在來の公羊學における大同主義或は大一統といふ思想の上に立脚し其の師であり尊敬する同志であつた康有爲の主義を一層徹底的に純理的に進めたものと見ることが出來る。それは先づ彼の時代卽ち清朝末期の國情から民主的共和制が天意天命の存する所の政治形態であるから萬人が對等の上に立つて共助共榮、人類平等の愛を以て絶對平和の天下とせねばならぬと言ふにあると思ふ。

そこでこの人類愛の精神から彼は從來の道德を批判し、五倫の中の義、親、別、序の四は平等愛に戻りそむくものと見てゐる。それはこれらの道德はその發生の動機が强者長者に都合のよい樣に利己的に作られたものであるからであつて、純粹な道德は無私的の動機から發生せねばならぬ。利害關係が互に對等的でなくてはならない。君、父、長、貴である所以で弱幼賤なるものを壓迫する樣な不平等なものであつてはならぬ。孔子が「君は君たり、臣は臣たり、子は子たり」と言つた樣な相對的のものであらねばならぬ。釋迦や基督の如き聖人は、かような自利的な一方的な道は其の成道の第一步で以て破棄してゐるし、釋迦基督孔子の三聖は朋友道としての信を重んじてゐる。この朋友道こそ萬人共通の大道である。朋友の間には平等と自由と節宜惟意の三つがある。之を總括するならば自主の權を失はぬといふことになる。上は天文を觀、下は地理を察し、遠く之を物に觀、近く之を身に取つても、能く自主たるものは興り、自主たり得ぬものは敗れるのが昭然たる公理である。五倫の中で自主の權を全具してゐるのは朋友の道のみである。之を三聖人の場合に照して見ても、孔子の弟子達は其の井里に背き、君臣父子夫婦兄弟の倫を捐てて孔子に從遊し或者は祿を求めて宰となつたし、基督の弟子も其の鄕關をすて君臣父子夫婦兄弟の倫をすてて基督に從遊した、甚しきものは稅吏漁師はその本業を捨てて天國に嬉しみ、親が死して歸葬することすら基督は許さなかつた程である。釋迦は君臣父子夫婦兄弟の倫は皆「空諸所有」とし之を捨てて無きが如く、獨り朋友に於てのみ出定入定に須臾も離れず、說法の時も必ず幾萬の人と俱にし必ず十方の諸佛諸菩薩が來會し、己も獅子座を離れず身を一切處に現

し、無邊恒河沙數の世界に偏く往き諸佛諸菩薩と會し、往來酬荅して曾て休息することが無かつた。甚しきに至つては華嚴經に說く所の如く暫く胎中に住すと雖も往來聚合說法してゐる、これ皆朋友に於ける道である。

孔子の敎に於ても君臣は朋友、父子は朋友、夫婦も兄弟も皆朋友であり、基督敎では、敵を視ること友の如くすと明かに標示してゐるではないか、佛敎では其の君を率ゐること臣の如く父母妻子眷屬は皆天と親しみ、一一出家受戒し、法會に會するものは皆同じく朋友である。所謂國は無くして一國の如く、所謂家は無くして一家の如く、所謂身は無くして一身の如くである。かくの如く五倫の中で朋友の倫のみが獨り尊いのである。今中外は變法を侈談するが五倫を變じようとしないのは凡そ至理安道の起點に從つてゐないと論じ、こゝに平等の倫理を提唱したことも彼の大同主義に卽する一端であらう。

譚嗣同は僅に三十三歲の壯年で以て非業の死を遂げた薄命の志士であるが、その鋭い直覺力と該博な識見から世界平和の理想を說いたのであるが、其の實現性は宗敎的精神に歸してゐる樣である。彼は世界の三大宗敎卽ち佛基儒なるものは敎主を異にし、時代と場所を異にしてはゐるが、其の最高の理想は平等といふことに歸すると信じ、之を彼の學的根柢たる公羊學でいふ三世の說から批評し次の如く考へてゐる。三聖の中では孔子が最も不幸であつた。孔子の時代は君主の法度が極端に嚴密で倫理道德も名によつて束縛箝制せられ、それが人心に喰ひ入つてゐて猝に改革することが出來ない狀態に在つた。そこで孔子は微言大義で隱晦の辭に托して婉曲にその旨を表はさざるを得なかつたのである。彼の時代は所謂據亂の世で君統の時代であつた。

基督は孔子に次いで不幸であつた。基督の時代も君主專制の時代であつたが中國程に禮儀差等の距離が深くなかつたので、天國の治を升平の象の中に宣傳することが出來た、それは升平の世で天統であつた。

たゞ釋迦は最も幸福な人であつた。其の國土は歷史的に歷代神聖の主といふものも無く、佛自身が世外に出家したのであるから世間に對して就避する所なく自由に大同の說を伸すことが出來たのである。それは太平の世で元統であ

つた。この大同の治は獨り其の父を父とせず其の子を子とせず、父子さへも無い。況んや君臣の關係は勿論無い、獨夫民賊の爲す所の束縛の名を以てして之に加へる所のものは有り得ないのである。佛は群教の上に獨り高く立つてゐる。これは時勢が然らざるを得ざらしめたのである。が要するに三教に於て教主の法身は一である。「三教教主は一である。吾その一を拜することは皆之を拜することである」といふ言葉を信じたいと彼は述べてゐるのである。

譚嗣同は別に禪を修めたといふ經驗を語つてはゐない。けれ共禪の旨にも通じ、華嚴には相當深く這入つたものの如く、此の方面からの所說も大いに聽く可きものがあり、佛教と政治的原理の關係に就ても獨特の所論もあるけれ共今はそれに迄及び得ず、たゞ「仁學」の要旨に就いて概述するに止めておく。尙譚嗣同の思想に就ては私の畏敬する小島祐馬博士の書かれた「藝文」大正六年十一月號の所載の論文及びアテネ新書の「中國の革命思想」なる名著を一讀せられて拙稿の不備を補正して戴きたい。(昭和二七、二、一〇)

なほ又「立命館文學」の本年五月號に掲げられた吉川勝治氏の「譚嗣同に於ける仁學の構造」と題する論文の如きも、吾人に大いに教ふる所があることをこゝに附記しておく。(昭和二七、七、六)